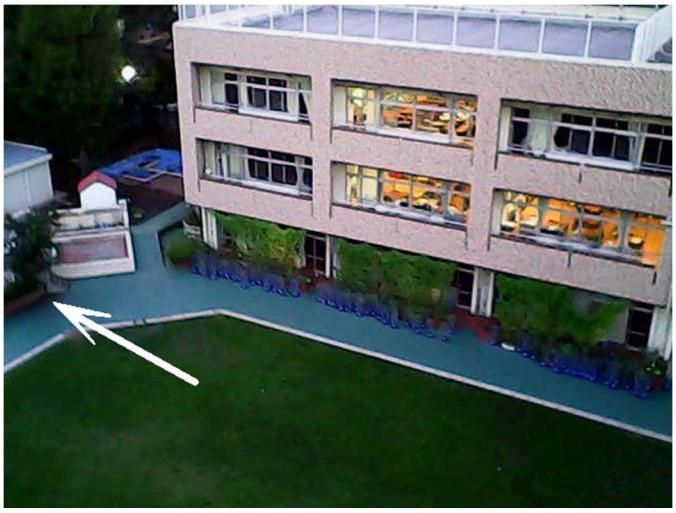
「日々の理科」（第 870 号） 2016（H28）,11,23

「教材化するということ」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

理科で「教材」というと、教材業者から買った磁石や豆電球を想像する。しかし、子どもの生活の中から見つけ出したものにも「教材」はたくさんある。「教材化」とは、「普通のものを、授業に使えるようにすること」言い換えれば「身近なものに、授業で使える価値を見出すこと」である。この営みを「教材研究」と呼び、本来我々教師にとって、最も重要な仕事のはずだ。しかし、日々の忙しさに紛れて、その教材研究がおろそかになっていると感じることがある。

校庭の隅にサルスベリの樹が一本ある。「百日紅（ひゃくじつこう）」の名の通り、夏の終わりに鮮やかな紅色の花をたくさんつけて、それが一ヵ月以上咲き続けている。樹皮がスベスベしているので、子どもたちは触ったり、皮を剥いだりして遊んでいる。ちなみに、実際に猿が滑ることはないそうだ。



上の写真は、自作の簡易ドローン（ラジコンのヘリコプターを改造）で撮った校庭の写真である。校庭の隅に、申し訳なさそうに立っているのがサルスベリ。

先日、ケヤキの種子（ブドウの種子に似ている）を拾いに校庭に出たら、サルスベリの樹に実がなっているのに気づいた。「気づいた」と書いたのは、30 年間毎日見ている校庭なのに、まさに初めて気づいたからである。「おっと、これは教材になるかも知れないぞ」私は一枝折って、理科準備室に持ち帰った。

若い果実は、シラカシのドングリのようである。３年生の子どもに何も言わずに見せたら、「ドングリだ」と言うに違いない。ドングリとの決定的なちがいは、ドングリは一つの「種子（殻斗）」なのに対し、サルスベリのそれは「果実」という点だ。「種子と果実のちがい（関係）」を学習させる、良い教材になりそうだ。熟すと六裂して、中に多くの種子が入っているのが見える。しかも種子には翼がついている。面白い！来年度は、計画的に教材化してみよう。